

第18回西アジア発掘調査報告会報告集
Proceedings of the 18th Annual Meeting of Excavations in West Asia

<西アジア歴史時代の調査>

ユーフラテス川流域の古代墓を探る

—シリア、ビシュリ山系ガーネム・アル・アリ遺跡近郊墓域の第5次調査(2010年)—

Investigating EBA Mortuary Practices on the Euphrates: The 2010 Season at the Cemeteries near Tell Ghanem al- 'Ali, the Jabal Bishri, Syria

久米 正吾
KUME, Shogo

国士舘大学イラク古代文化研究所共同研究員
Co-operative Research Fellow, the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

小野 勇
ONO, Isamu

国士舘大学理工学部技術職員
Technical Staff, School of Science and Engineering, Kokushikan University

赤司 千恵
AKASHI, Chie

早稲田大学大学院文学研究科博士課程大学院生
Ph.D. student, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University

大沼 克彦
OHNUMA, Katsuhiko

国士舘大学イラク古代文化研究所教授
Professor, the Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University

1. はじめに

テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡は、シリア中央部のユーフラテス川中流域に位置し、後背にビシュリ山をひかえる。この地域の年間降水量は200mmに満たない乾燥地で安定した天水農耕は営めない。また、シュメール第Ⅲ王朝やバビロニアなど古代王朝の交替劇に深く関わったとされるアモリ系遊牧集団の故地ともいわれる。このため、ユーフラテス川中流域の紀元前3千年紀の考古学研究は、この地理的、環境的、あるいは社会的辺境集団がどのような生活様式を営み、社会を構成していたか探ることにある。

この課題の解明のために実施された「セム系部族社会」プロジェクト（大沼を代表とした2005-2009年度文科省科研費・特定領域研究）の一環として2008年に始まったガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墓地の調査は、新たな展開を迎え

つある。これまでの調査では、主として盗掘や破壊を受けた墓の分布調査、クリーニング、限定的な試掘調査などに基づき、個々の墓群の形成過程や特質について被葬者の出自関係を軸に仮説的に議論してきた。一方で、その仮説を検証するための具体的な考古学的証拠に欠けている、というのが実情であった。しかし、昨年秋の残存状況の良好なワディ・ダバ墓域の発見により、ようやくこの課題を解決するスタートラインに立つことができた。そこで、2010年の調査ではこの墓域の発掘調査を実施し、未盗掘墓を含めた良質な考古学、古人類学、その他の基礎的データを可能な限り収集することを目標として調査を実施した。調査日程は10月12日から11月18日までの約1ヶ月強、真夏には劣るといえ乾燥地特有の強い日差しの中での調査であった。

2. ワディ・ダバ墓域での発掘調査

ワディ・ダバ墓域は、現在のガーネム・

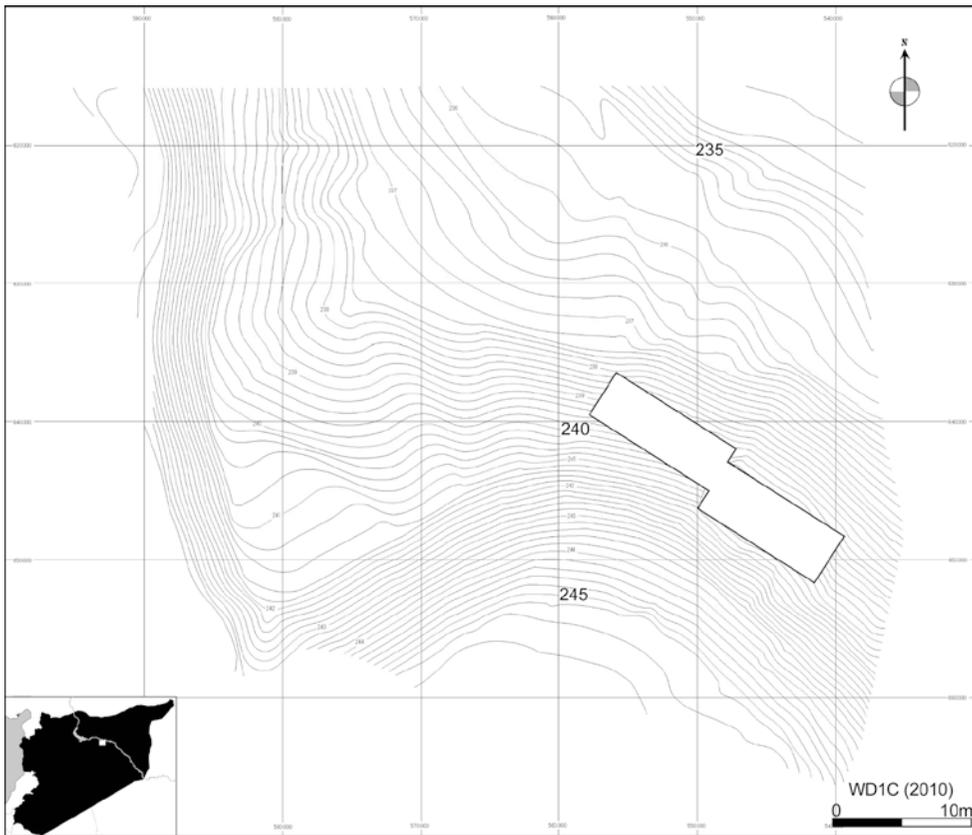


図1 ワディ・ダバ墓域第1地区C地点 (WD1C) と発掘区の位置

アル＝アリ村内に位置する。ビシュリ台地から村内に注ぎ込むワディ・ダバ（ハイエナの水）河口斜面とユーフラテス段丘斜面に広がる地下式横穴墓群の範囲をWD1区と略称している。その中で残存状況の良好な墓が昨年発見されたC地点（WD1C）の調査を本年も継続した。

昨年の調査では、4×10mの主トレンチと1×5mの確認用トレンチを設定し、発掘した1基を含め、計5基の地下式横穴墓入り口の縦坑ないし盗掘坑と見られるピットが確認されていた。本年はまずこれら4つのピットを発掘し、墓の有無を確認する作業から始めた。同時に、これらのピットの拡がりを確認するために、確認用トレン

チを3.5×10mに拡大して表面調査を実施した。このため、現在トレンチは75㎡の範囲まで拡大されている（図1）。

調査の結果、昨年確認されていた4基のピットの内、3基が地下式横穴墓であることが判明した。また、新たに拡張された発掘区で見つかった1基の地下式横穴墓も発掘した。さらに、これまでの調査で見逃されていた小型墓も発見されたため、今シーズンは計6基の地下式横穴墓を調査した。以下、その概略について述べる（図2）。

WD1C-2号墓（図3）は縦坑部と墓室南側を大型の盗掘坑によって破壊されていたが、約幅2.8×深さ1.5mの楕円形の墓室を持つことが残存部から判明した。原位置の

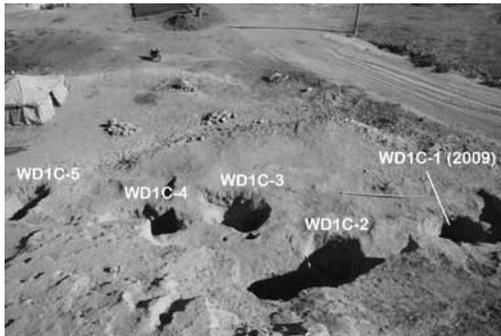


図2 発掘区全景（南西より）

WD1C-2～5号墓の発掘を実施した。隣接墓と連結する小型の地下式横穴墓WD1C-2-3及びWD1C-5-6号墓の縦坑部は、調査期間の関係上発掘を実施していない。

出土遺物は認められなかったが、盗掘坑内の覆土からは年代の指標となるユーフラテス黒色帯文土器を含む完形、半完形の土器、青銅製のピン、人骨集中部等が確認されている。この墓の縦坑部床面には幅0.2 m程の溝が切られており、その溝は縦坑側壁の開口部（径0.3 m程）を通じて隣接するWD1C-2-3号墓の墓室内につながる。何らかの排水に関わる施設と想定されるが、詳細は今後検討したい。

WD1C-2-3号墓は当初WD1C-2号墓の一部を構成するニッチ状遺構として発掘を実施した。しかし、発掘を進めたところ幼児骨が横臥屈葬で埋葬された小型の未盗掘の地下式横穴墓であることが判明した。墓室は幅0.6 m程であり、墓室の入り口は石膏の平石で閉じられている。縦坑部は調査期間の関係で今回は発掘できなかったが、幅0.6 m程の縦坑の入り口部が確認されている。WD1C-2号墓から続く溝はこの墓の床面を横切っており、さらに後述するWD1C-3号墓の上部墓室につながっている。副葬品は完形土器、貝製の装飾品などを含む。特に、胴部に連続的な溝を持つ薄手のゴブレット型土器は、紀元前3千年紀



図3 WD1C-2号墓（北東より）

縦坑部の床には溝が切られている。縦坑の北西壁（写真右）には、WD1C-2-3号墓の開口部があり溝とつながっている。

中頃に特徴的な土器である。

WD1C-3号墓（図4）は、深さ約3 mの縦坑と上部と下部に2つの墓室を有する。縦坑下部に位置する墓室は、幅約2 mを測る隅丸方形で高さは1 m程ある。墓室内はほぼ完全に盗掘を受けており、墓室の隅に半完形の土器が5点ほど確認された。それらはユーフラテス黒色帯文土器を含む。また、土器の内の1つには断片になった人骨が入っていた。これらの人骨を集めて土器の中に入れたのが盗掘者か、あるいは埋葬時の営為かについては判断が難しい。その他、ビーズや青銅製のピンの破片もわずかに見つかった。一方、縦坑上部に位置する墓室は、幅1 m程の楕円形を呈し、縦坑の壁にニッチ状に入り込む。子供の遺体と思われる人骨が未盗掘の状態が残っていた（図5）。埋葬姿勢は横臥屈葬である。副葬土器は注口土器や短頸壺、ミニチュア土器など前期青銅器時代の副葬土器レパートリーを含む。また、数百点を数える貝製ビーズやファイアンス製のペンダント（図6）、貝製のリングなど装飾品も豊富であったことから、埋葬遺体は女兒であったと予想される。なお、WD1C-2-3号墓から続く



図4 WD1C-3号墓（北東より）
下部の主室と上部のニッチ状墓室の2つの墓室が確認された。



図6 WD1C-3号墓上部のニッチ状墓室から出土したファイアンス製ペンダント
その他、貝製ビーズが数百点出土したことから、埋葬されていたのは女兒だったかも知れない。

溝はこの墓室の床面を横切って走り、後述のWD1C-4号墓の縦坑部分で終息する。この溝は少なくとも4つの墓をつないでいることになるが、詳細については先にも触れ



図5 WD1C-3号墓上部の未盗掘ニッチ状墓室（北東より）
子供の遺体が横臥屈葬で埋葬されていた。



図7 WD1C-4号墓（北東より）
縦坑の南西（写真上）と北西（写真右）側に石膏平石で閉塞された墓室が見える（今回は未掘）。南西壁（写真上）にはもう一つニッチ状の墓室が見つかった。

たようによくわかっていない。現時点で確実なことは、この排水設備が幼児や子供の埋葬と深く関わっていることだけである。

WD1C-4号墓は、長さ2.4×幅1.3×深さ2.2mの長方形の縦坑を有する（図7）。少なくとも3つの盗掘坑による攪乱が認められた。この地下式横穴墓には計3つの墓室がある。まず、縦坑の南西側及び北西側に墓室の入り口がそれぞれ一つずつ見つかっている。調査期間の都合上、これら2つの墓室の調査は来年に繰り越したが、いずれも他の墓室と同様に楕円形ないし矩形の墓室を呈しているものと思われる。いずれの墓室も閉塞用の石膏平石が墓室入り口に



図8 WD1C-4号墓のニッチ状墓室出土の頭骨
上顎と下顎の位置が90度ずれている



図10 登録した完形副葬土器34点
ユーフラテス黒色帯文土器を含む紀元前3千年紀後半の副葬土器レパートリーで構成される(写真右下のスケールは30cm)。

残っていたものの、残念ながら盗掘被害が著しかった。縦坑の南西側にはもう一つ墓室が見つかった。WD1C-3号墓の上部墓室と同じく、縦坑の入り口から約0.8m下がった部分にニッチ状に入り込む。約1mの矩形を呈し、高さは0.7m程の小型の墓室である。前期青銅器時代の副葬土器レパートリーで構成される7点の完形土器や土製の車輪模型など副葬品は豊富であった。しかし、いずれの副葬品も原位置を留めていない。多くの出土品が完形で残されているにもかかわらず、散乱して出土するこの状況は、二通りの解釈が可能である。一つは古代の盗掘により荒らされた可能性であり、もう一つは再葬墓であった可能性である。確たる証拠を得たわけではないが、解剖学



図9 WD1C-5号墓(北東より)
縦坑の床面には溝が切られている。縦坑の北西(写真右)壁には、WD1C-5-6号墓の開口部と排水口が見える。

的位置を留めず不自然に埋葬されて出土した人骨は、後者の可能性を示唆する(図8)。

WD1C-5号墓(図9)は、縦坑上部がやはり盗掘坑により破壊されていたが、長さ1.8×幅1.3×深さ1.3mの縦坑と長さ1.9×幅1.1×高さ0.9mの楕円形の墓室で構成される。墓室内はほぼ完全に盗掘を受けており、2~3点の完形土器とピンやリングなど青銅製品の破片が回収されたにすぎなかった。しかし、WD1C-2号墓同様、縦坑床面に幅0.15m程の溝が切られている。この溝は縦坑の北西側壁に開けられた径0.1m程の開口部から排出される水が受けられるように設置されている。この排水口は後述するWD1C-5-6号墓に付属するものであり、その上部には約0.6×0.4m程の開口部がさらに穿たれWD1C-5号墓とWD1C-5-6号墓を連結している。

そのWD1C-5-6号墓は、長さ1.6×幅0.9×高さ0.9m程の楕円形の小型墓である。WD1C-2-3号墓と同じく、WD1C-5号墓の側壁に掘り込まれたニッチ状遺構として当初発掘したため、縦坑部分はまだ確認されていない。しかし、墓室天井部には開口部が二つあり、縦坑部及び盗掘坑であった可能性がある。来年度発掘して確認したい。

全ての出土品が原位置を保っていたわけではなく、かつ、破損品も認められたため、盗掘を受けた可能性は高い。にもかかわらず、ユーフラテス黒色帯文土器を含む8点の完形、半完形の副葬土器を出土した。また、埋葬遺体は墓室内には認められなかったものの、鉢型土器の中から子供と思われる小型の頭骸骨片が見つかった。盗掘時の所産か再葬によるものかは判然としない。

4. おわりに

ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代の墳墓群を対象とした本研究は、3年目にしてようやく該期の未盗掘墓を発見することができた。今回見つかった2基の未盗掘墓（WDIC-2-3号墓及びWDIC-3号上部墓）は、いずれも幼児ないし子供を埋葬した小型あるいは付属的な墓であり、このために盗掘を免れ得た墓であった。来年度はさらに発掘区を拡張することにより、主室を含めた完全な未盗掘墓の発見を目指したい。これにより、主室と小型／付属墓の被葬者の社会関係についてより踏み込んだ議論が可能となる。なお、出土人骨の古人類学的研究は来年度現地に専門家を招聘して実施する予定である。

未盗掘墓の発見は研究の幅を最大限に広げる効果があるが、たとえ盗掘墓であったとしても様々な知見を与えてくれている。一つは、出土した副葬土器の検討により、今回調査した墓は全て極めて限られた時期（紀元前2450～2300年頃）に営まれたことである（図10）。二つ目に、地下式横穴墓の形態、サイズ、墓室の数などが極めて多様なことである。これは、地下式横穴墓の掘削が家族や親族など埋葬単位で個別に実施され、墓掘り職人などの専門家が存在していなかったことを示唆する。三つ目

にWDIC-4号墓のニッチ状墓室の例のように、当時、再葬の習慣があったかも知れないことである。再葬墓は同時期のユーフラテス川流域ですでに報告例があるが、今後出土人骨の検討などを含め、再葬の意義と役割について詳しく議論していく予定である。四つ目に幼児や子供と大人では異なる埋葬法が営まれていた可能性がある。すなわち、大人は主室に優先的に埋葬される一方、幼児や子供は小型の地下式横穴墓やニッチ状墓室に埋葬されていたようだ。最後に四つ目と関連して、幼児や子供の墓は排水施設を伴い、その排水施設によって隣接する墓がつながっていることである。このような排水施設を伴う墓の類例の情報は未だ得ていないが、今後詳しく検討することにより、この施設の機能について追求していきたい。

以上のような知見は、被葬者間の社会関係のみならず、埋葬に伴う葬送儀礼や当時の死生観についても議論できる可能性を与えている。残存状況の良好なこの地点の調査をさらに継続することにより、これらの課題に寄与する基礎的データを来年度も収集する予定である。

今回の調査は日本私立学校振興・共済事業団、平成22年度学術研究振興資金（代表：大沼）及び国士舘大学の助成によって実施された。現地調査では、シリア側団長のAhmed Sultan氏に多大なご支援を頂いたほか、Heba Al Ali、Ruba Deeb、後藤智哉、Abudallah al-Hamid、Aed Issa、Mohammed Jajanの各氏に現地調査の一部にご協力頂いた。末筆ながらお礼申し上げたい。

この調査に関する既発表文献（昨年度掲載分に追加）

- ・久米正吾（2010a）「シリア、テル・ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墓地遺跡における墓群構造」佐藤宏之（編）『若手研究者成果論集』1-13頁 文部科学省科学研究費特定領域研究総括班。
- ・久米正吾（2010b）「墓から迫るセム系部族社会の形成」『若手研究者が挑むセム系部族社会の形成－ユーフラテス河中流域の青銅器時代考古学－（岡山市立オリエント美術館特別講演会発表要旨集）』13-18頁 岡山市立オリエント美術館。
- ・久米正吾・沼本宏俊（2010a）「ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査（Ⅱ）」『セム系部族社会の形成 Newsletter』17: 6-13頁。
- ・久米正吾・沼本宏俊（2010b）「ガーネム・アル＝アリ遺跡直近の前期青銅器時代墳墓群の調査」大沼克彦・西秋良宏（編）『紀元前3千年紀の西アジア－ユーフラテス河中流域に部族社会の原点を探る－』45-55頁 六一書房。
- ・久米正吾・沼本宏俊（2010c）「ユーフラテス川流域の古代墓を探る－シリア、ビシュリ山系ガーネム・アル＝アリ遺跡近郊墓域の第3次・4次調査（2009年）－」『第17回西アジア発掘調査報告会報告集』82-88頁 日本西アジア考古学会。
- ・久米正吾・沼本宏俊（2010d）「テル・ガーネ

ム・アル＝アリ遺跡（前期青銅器時代）直近墓地の発掘調査（2009年）」『日本オリエント学会第52回大会ポスターセッション』国土舘大学世田谷キャンパス。

- ・Nakano, Y. and H. Ishida (2010) "Human remains from the Bronze Age sites in Bishri region, The Middle Euphrates, Syria." In K. Ohnuma *et al.* (eds.): 105-115.
- ・Numoto, H. and S. Kume (2010a) "Soundings of hilltop burial mounds near Tell Ghanem al-'Ali." In K. Ohnuma and M. Sarhan (eds.), *Archaeological research in the Bishri region: report of the ninth working season. Al-Rāfidān* 31: 132-136.
- ・Numoto, H. and S. Kume (2010b) "Cleaning and survey of Early Bronze Age shaft graves at Wadi Daba cemetery near Tell Ghanem al-'Ali." In K. Ohnuma and M. Sarhan (eds.), *Archaeological research in the Bishri region: report of the eleventh working season. Al-Rāfidān* 31: 185-190.
- ・Numoto, H. and S. Kume (2010c) "Survey and sondage at the cemeteries near the site of Tell Ghanem al'Ali." In K. Ohnuma *et al.* 2010: 49-60.
- ・Ohnuma, K. *et al.* (eds.) (2010) *Formation of Tribal Communities: Integrated Research in the Middle Euphrates, Syria. Al-Rāfidān Special Issue*. The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University.